

中原中也

含羞

在りし日の歌

長野 隆

なにゆゑに こゝろかくは羞ぢらふ
秋 風白き日の山かげなりき
椎の枯葉の落窪に
幹々は いやにおとなびイチみたり

枝々の 拱みあはすあたりかなしげ
の
空は死児等の亡霊にみち まばたき
ぬ

をりしもかなた野のうへは
あすとらんかのあはひ縫ふ 古代の
象の夢なりき

椎の枯葉の落窪に
幹々は いやにおとなびイチみたり
その日 その幹の隙 睦みし瞳
姉らしき色 きみはありにし

その日 その幹の隙 睦みし瞳
姉らしき色 きみはありにし

あゝ！ 過ぎし日の 仄燃えあざや
ぐをりをりは
わが心 なにゆゑに なにゆゑにか
くは羞ぢらふ……

（「在りし日の歌」）

『解説』 「含羞」は詩集『在りし日の歌』の巻頭を飾り、集中の同名の詩章の冒頭に布置され、さらには同名の副題まで持たされた作品であることから、中原の「在りし日」の如何をめぐって最も議論の多い一篇。初出は「文学界」昭和十一年一月号。制作されたのは前年の十一月十三日までで、その時には副題はなかった。副題は詩集編纂時に添えられたもので、その点から見ても、詩集全体の意匠に深く関わっている。『研究の展望』とりざたされている問題の過半は、(1)「在りし日」の語義の確定にあるが、(2)第二連のイメージ解釈や、(3)「含羞」という主題の位相、及び、(4)一、三連の「幹々は……」以下二行の解釈なども議論の的となっている。

(1)については、むろん作品「含羞」

内部の問題に留まらない。「在りし日」は中原の意味では「過ぎし日」の意味である①とする大岡昇平や、そこに「過ぎし日」以上の「もはや現時点からは隔絶して戻らぬ遠い日」②を見る太田静一、さらに「空間的隔絶性」という点を付加し強調しておきたい③とする中原豊などは、「在りし日」を基本的に「過去」と見ることで同様だが、大岡が中原の他の用例に重ねて「幼なかりし日」を指すのは明瞭（前掲）と傾くのに対し、太田は「この詩が泰子にちなむ曾愛回想詩であることは否定出来まい」④と、それをあくまで泰子との恋愛期に限定している。或いは佐々木幹郎のように「在りし日」を「過去」としながらも、それを「在りし日」の「詩人」という意味⑤に読みかえて、「自分自身で、自分の創造したかつての「詩人」を置き去りにしようとした」（同）中原の姿を見る立場もある。対して、「在りし日」に「過去」以上の含意を認めようというのが水野櫻、高橋英夫、佐藤泰正らである。水野は「在りし日」に絡む種々の用例を検討し、そこに自己の死を未来に仮想しやすい中

原の資質（時間意識）を認め、その地点から自己の生前―「在りし日」―を振り返るような視線の存在を指摘しており⑥、これが「生前」に限定されない時間意識の運動をいうのであれば、いかにも説得力を持つ。同時期の「コギト」派や「四季」派の抒情の質とも関連が見えてくるからである。また、高橋や佐藤は「在りし日」に「過ぎし日」の用法を認めながら、なおもう一方の位相のあることを言う。高橋はそれを《異質の気圏》⑦と呼び、佐藤は「他界」的な位相の確認から「在りし日」とはまた「過ぎし日」を超えて、「在りうべかりし日」からの挽歌とも読みとれなくはあるまい⑧とする。

(2)については、いうまでもなく「死児等の亡霊にみち」た「空」のイメージと、「野のうへ」の「あすとらかんのあはひ縫ふ 古代の象の夢」の解釈が問題になる。そしてこれが、実にまちなものだ。北川透はそれをイメージの喚起と連想の内に読み、(3)や(5)の問題と絡めて、その《含羞の意識》の下に《死児のイメージと愛のイメージが、切り離しがたく結びついている》⑨と

ころを確認している。吉田熙生に依れば《「あすとらかん」は極めて短命な運命にある子羊であり、「象」の力強さ、長い生命とは対照的な存在であって、やがては「死児」の列に加わる生物》⑩のゆえに《この第二連の世界は、不吉な原初的世界としての像を明確にする》(同)という。また高橋英夫は(1)や(3)との関連で《羞じらう子供がいる、山かげの至福の空間と、不気味な子供たちの亡霊のいる「空」が対比され》

⑪で、その《一つは「在りし日」の仮象となり、もう一つは「空」に喚び上げられて、別の「在りし日」の異象となった》(同)と見、池田純滄は富永太郎の書簡に「暗夜行路」の中の「巨象の戦争の空想」に関する記述を認め、これとの関連で《「あすとらかん」は子羊たちの姿をした白い雲で、「古代の象」は「巨大な象の姿に似た山」ではないのではないか。「死児等の亡霊」から目をそらしたときに、《山》と《雲》がそのような「夢」、つまり《幻覚》としてむこうの「野のうへ」に見えたのだ》⑫と、平凡だが無理のない見解を提出している。

(3)については(4)(5)とともに、(1)(2)の問題も踏まえて分析されなくてはならない。旧くは中村稔の《この作品を詩にしているのは過去の追惜に含羞をおぼえる詩人の心情にある》⑬と見るあたりにはじまり、吉田熙生の言う《「羞じらい」の二つの様相》⑭の指摘に落ち着かせることもできる。すなわち、ここでの「過ぎし日」には二面があり、《一つは、「姉らしき」人との記憶という明るい面であり、もう一つは「死児」や「あすとらかん」の像という暗い面である》(同)とし、特に後者の像につながるそれは《この死者の「清純さ」に対する「卑怯にも似た」という倫理的劣位感情であり、《詩人の自責の念にほかならない》(同)と言う。或いは高橋英夫のように、そこに《「姉」の瞳を迎え、おとなびたさまの樹々の幹に取り巻かれて、幼い子供の含羞が一篇に流れ出している》⑮のを見、《大人と社会に対した時、子供が示す原型的な感情の一つとしての含羞》(同)を認める立場もある。

〔註〕①「在りし日、幼なかりし日」(「群像」昭41・10。「中原中也」角川書店、

昭49・1所収)、②『中原中也未刊詩研究』(審美社、昭44・9)、③『含羞』論——「在りし日」の隔絶性について」(『語文研究』五四、昭57・12)、④「中原中也『在りし日の歌』考」『含羞』詩について」(『宇部国文研究』一四、昭58・3)、⑤『中原中也』(筑摩書房、昭63・4)、⑥『中原中也——「在りし日」の解釈をめぐる』(『東京家政学院大学紀要』一八、昭53・5)、⑦『在りし日の歌』(『國文學』昭58・4)、⑧『中原中也の詩の世界』(教文社、昭60・11)、⑨『中原中也の世界』(紀伊国屋新書、昭43・4)、⑩『鑑賞日本現代文学20中原中也』(角川書店、昭56・4)、⑪同⑦、⑫『含羞』(『解釈と鑑賞』平元・9)、⑬『中也のうた』(社会思想社、昭45・9)、⑭同⑩、⑮同⑦

『問題点』 中原の「在りし日」は何時を指すのかという問題——この一見して興味をそそられそうな、しかし不毛とも見える問題は、やはり今後も引き継がれていくのだろうか。それが或いは「生前」を指すか、と思わせる背景には、この語義の一般的通用例とともに中原のあの「名辞以前の世界」の呪

縛があるのだろう。諸家の見解にいちいち頷きながら、要するに中原は「在りし日」と記したわけだから、それは「Days that passed」(過ぎし日)と「Days when I lived」(在りし日)との違いが言いたかったのだな、と平凡な結論を持つに至った。前者が過去という「生」の喪失にアクセントがかかるのに対し、後者はその現前にアクセントを置く。これに「Days when I was young」(幼なかりし日)を突き合わせて見れば、どちらの位相に近いかは自ずと明らかだ。ただ、水野繆の執拗な肉薄には、ふと伊東静雄の「わが死せむ美しき日のために……」(『曠野の歌』)などが想起させられ、中原の「へいま」と「ここ」はどうだったか、と、それを再度問い直す必要を覚えた。

また、中原のここでの「羞じらい」には、これまでの幾多の「解釈」を超えてなお、じかに伝わってくるものがあるし、それが人間の時間の問題や中原の個人史に関わる何かであるのも、容易に推察がつく。その点、池田純益が『十五の春』(大正十年)から「夏」そして「秋」にかけて、少年中也に何

か決定的な出来事があったのではと思われて仕方がない(『前掲』)と言う辺り、思わず身を乗り出してみたくなる。が、そういう問題ではないのかもしれない。私個人としては、旧制とはいえず中学落第の憂き身で京都の私立中学校に籍を求め、以後モラトリアムのなま「対人圏」に単身で向き合う、その矜持の様が想われてならない。年上の女優のみか年上の秀才文学青年らを相手に、例えば中原の「ダダ」は、「ダダ」ならではの知れ文学の受け皿となり、詩の修業にはなつたろうが、真に「歴史」たりえたのだろうか。重要で決定的な経験には違いないが、その「背伸び」にも似た姿勢の持続に「空白」は訪れなかったか。それが気になる。

その外の問題は、いづれも難しい。「詩的曖昧」の方へ逃げるわけにもいかぬし、それを忘れるわけにもいくまい。ただ、これは暗黙の了解かも知れぬが、「椎の木」の立つ様は、どこか頼り甲斐のある、大人びた印象を与えるものだが……余分なことであつた。

— 弘前大学助教授 —